

〈文化史学会第十六回大会発表要旨〉

漢語の国語化と国際化及びその名称

フフバール

中華人民共和国成立以降、中国では特定の言語に「国語」のステータスを与えないという理念により、中国の主な言語である漢民族の共通語の名称を「国語」(Guoyu)から「普通話」(Putonghua)に改め、実際は「普通話」の意味で「漢語」(Hanyu)という名称が多く使われるようになった。そして、「普通話」は「漢民族の共通語」であると定義されていたが、二〇〇一年から実施された「中華人民共和国国家通用语言文字法」で「普通話」は、「国家通用言語」と定められ、「国家語」化が法的な根拠を得た。それに、近年、中国の急速な経済発展に伴う中国語の国際的広がりにより、国内向けであった「漢語」という名称がその論理性を問われ、華人社会で使われている「華語」(Huayu)を「漢語」の代わりに使うべきであるという主張や「国語」という名称の復活を訴える考えが台頭している。本発表では、「普通話」「漢語」「華語」「国語」という名称の「国家語」名称としての論理性や政治性を分析したうえ、「華語」か「国語」を「普通話」や「漢語」の代わりにするべきであるという見方に、国内少数民族語に関する法的な視点が欠けていること及び社会主義中国が堅持しているレーニン主義の言語観が変化してきたことを指摘した。

言語から音楽へ ― 音楽記号学をめぐって ―

江 中 里 子

一九六〇年代から七〇年代にかけてフランス思想界では、実存主義に代わって構造主義が隆盛となり、文学や映画、美術など多くの分野の作品分析に応用されて、記号学と称されていた。

ことばと音楽は、「音」と「意味」を伴うところから、古くからさまざまなレベルで比較されてきたが、この期に及んで、まったく新しい比較の方法を得ることになる。音楽をことば同様、音を使って意味を生み出す装置と捉え、構造分析を試みたのである。

構造主義はもともと、二〇世紀の初頭、ソシユールの提唱した構造言語学を基礎としている。六〇年代半ば、ジョルジュ・ムーナンの下で言語学と記号学を学んだジャン・ジャック・ナティエは、ソシユール言語学の根幹を成す幾つかの観念を音楽記号学に応用した。またトゥルベツコイとヤコブソンの音韻論、コミュニケーション理論、モリノの記号論の三分法など、先達の理論からさまざまな観念を借用して、ナティエの音楽記号学は構築されているのである。

時代はポストモダン、ポスト・ポストモダンと過ぎて、構造主義はもはや忘れ去られたかに見える。しかし、脳科学の発展がもたらす受容の科学の可能性に期待するにしても、形態と意味の関係を問う表徴の場においては、構造主義はなお変わらない威力を持ち続けるのではなからうか。